

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

128 パリを描いた日本人画家（2022年9月15日）

パリは、世界中から多くの芸術家を惹きつけてきました。日本人画家もフランスで絵画を学び、創作活動を行いました。その中で、当時のパリを描いた作品も残されています。

最初にフランスに留学した日本人画家は、渡辺省亭（1852-1918）だと言われています。省亭は、日本で最初の貿易会社である起立工商会社に就職し、美術工芸品の図案を描く仕事をしていました。1878年のパリ万国博覧会に出品した作品の図案が入選したことがきっかけで、同社の嘱託社員としてパリに派遣されました。エドガー・ドガなど印象派の画家と交流し、西洋風の精密な描写を取り入れたモダンな日本画を描きました。

その後、日本近代洋画の父と言われる黒田清輝（※1）を始め、浅井忠、久米桂一郎、和田英作、小島虎次郎、安井曾太郎、岡田三郎助、藤島武二、山本芳翠、藤雅三、佐伯祐三（※2）などフランスで絵画を学んだ多くの画家が、日本の西洋画の発展に貢献しました。（写真右は、佐伯祐三が描いたパリの「パンテオン」）。



フランスで最も有名な日本人画家と言えば、エコール・ド・パリを代表するレオナルド・フジタ（藤田嗣治）（※3）ではないでしょうか。フジタがパリを描いた作品としては、ノートルダム大聖堂があるシテ島を描いた作品「Notre-Dame, Quai aux fleurs」（「フルール河岸、ノートルダム大聖堂」）（写真右）があります。



パリを愛し続けた画家と言えば、赤木曠児郎さん（1934-2021）を忘れてはいけません。赤木さんは60年近くパリで生活し、毎日のように街角にイーゼルを立てて、パリの街を描き続けました。パリ15区に暮らしていた赤木さんは、季節や時間帯によって表情を変えるエッフェル塔（写真左下）（15区に隣接する7区に所在）を数多く描きました。日本大使館のすぐ近くにあるモンソー公園の門（写真右下）は、大使館員にとっては馴染み深い光景です。メトロの駅（モンソ

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

一公園の絵の下) は、パリを象徴する景色の一つではないでしょうか。赤木さんは、パリ 20 区にある「日本通り」(Rue du Japon) を描いた数少ない画家の一人です。この記事の中の写真をご覧のとおり、赤木さんは、緻密な線を使って、赤木さん独特の色使いでパリの街を描きました。特に赤木さんの作品のトレードマークとも言える赤い色を多く使いました。赤木さんの苗字に「赤」の字が使われているのは、偶然ではないかもしれません。赤木さんが描いたパリの画集を見ていると、赤木さんがいかにパリの街を愛していたかが分かります。

パリで暮らした日本人画家が描いたパリの風景は、彼らがパリを愛した証です。



(※ 1) 76 グレー＝シュル＝ロワンの黒田清輝通り

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100227561.pdf>

(※ 2) 126 グランモランを描いた佐伯祐三

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100388297.pdf>

(※ 3) 88 レオナール・フジタが暮らした最後の家

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100262644.pdf>